



神奈川県

かながわ スポーツタイムズ

平成29年(2017)
Vol. 68

◇特別インタビュー◇



早野宏史さん

「ストロングポイントで戦う」

◇インタビュー

東芝フレイフルーパス 日本代表キャプテン

リーチ マイケル選手

「日本人の『強さ』を見せたい」

Toshiba © photo by Yuka SHIGA

- ◇総合型地域スポーツクラブ活動紹介
- ◇東京 2020 オリンピック・パラリンピック
特集「東京オリ・パラ 1000 日前！」

日本人の「強さ」を見せたい

東芝ブレイブルーパス

リーチマイケル

ラグビーワールドカップ2015イングランド大会で、優勝候補の南アフリカ代表を破り「史上最大の番狂わせ」を演じた当時の日本代表キャプテン。現在日本代表復帰を果たしたリーチマイケル選手に、ラグビーの楽しさ、指導者の魅力、南アフリカ戦の話などを聞いた。

ラグビーを始めたころ

母国ニュージーランドのオールブラックスというラグビーの強豪チームに影響を受けたのと、私の母親がラグビー好きだったことがきっかけで5歳からラグビーを始めました。最初はスクラムハーフ、その次にナンバーエイト、次にプロップ、フッカー、フランカーと様々なポジションを経て、またナンバーエイトに戻りました。ラグビーの魅力は、背が高くても低くても、足が速くても遅くても、誰にでも力が生かせるポジションがあることだと思います。ナンバーエイトというのはオールラウンドな選手のことです。走る、タックル、パス、キック、スクラムをコントロールする、などです。そしてナンバーエイトの面白さは、自由があること。決まったことはほとんどなく、型にはまらず、バックスともフォワードとも一緒にプレーができ、チームのキーになるポジションです。スピードが必要で運動量もあったほうがいい。パワーがあっても、走れるほうがいい。先頭を切って何回も突っ込めるのがベストです。そういう選手を常に目指したいと思っています。ラグビーを始めたころからタックルが上手で年上のチームに入りました。自分よりも2歳年上の人たちとやっていました。もともとタックルやコンタクトが好きでした。お兄ちゃんともよく喧嘩をして、自然と身体が強くなって、周りの子たちよりも力をつけました。



<ラグビーのポジション>



FW フォワード

1番、3番 PR:プロップ、2番 HO:フッカー
4番、5番 LO:ロック 6番、7番 FL:フランカー
8番 No. 8:ナンバーエイト

BK バックス

9番 SH:スクラムハーフ 10番 SO:スタンドオフ
12番、13番 CTB:センター
11番、14番 WTB:ウィング
15番 FB:フルバック

出典 日本ラグビーフットボール協会

日本のイメージを変えたい

日本に留学したのは、ニュージーランドにいたときに、私の家にホームステイで来ていた日本人留学生の影響です。日本のラグビー強豪校で、一軍で試合にも出ているような人でした。私は、日本どころかアジアの人がラグビーをやっていることをまず知りませんでした。いつもバスケットやサッカーをしているイメージでしたが、ラグビーをやっていることを知って日本に興味を持ち、いつかチャンスがあれば日本に行きた

いと思ったのです。

日本の高校に留学してみると、日本のイメージが自分のイメージとは違いました。もっとごちゃごちゃしていて、香港や中国のイメージでした。でも留学先の札幌は、緑が多くて混んでいなくてびっくりしました。車も新品で、ニュージーランドのボロボロの車とは違いました（笑）。

最初は全然日本語もわかりませんでした。日本の文化、社会の常識もだんだんわかるようになってきました。ニュージーランドに帰ってまた来日した時に、ニュージーランドはストレートな言い方をしますが、日本人は裏から回りくどく言うので時間がかかり、日本人は気を遣うというのが分かりました。もっとストレートに言えばいいのに和を重んじるのです。日本にずっといたので、気を遣って伝えることが普通だと思っていましたが、ニュージーランドに帰ったらそうでなく違いを学びました。高校2年生くらいから日本代表に入り、日本は弱いと馬鹿にする国が多くて、ずっと日本でやってきた私は「そんなことはない」と思っていました。たしかに代表チームは負けていましたが、日本には良い選手がたくさんいる。それをずっと証明したいと思っていました。

ベースを作ってくれた指導者たち

印象に残っている指導者は、日本の高校の指導者です。日本に来たばかりの私にいろいろ教えてくれて、土台を作ってくれました。高校の日本代表になりオーストラリア遠征に行き、帰ってきてすぐ高校の合宿でしたが、「1日休ませてほしい」と言ったら、「ダメ」って言われました。午前中に合流して午後から試合に出ました。その時は多少腹が立ちましたが、後になって理解できました。タフになることを教えられたのだと思っています。

東海大学のコーチも印象に残っています。理不尽（笑）。しんどいこともたくさんしました。プレッシャーをかけて、メンタルを崩されました。当時は理不尽だと思っていたのですが、今思うとプラスになっていて、意味があったのだと思います。東海大学は入学当初は弱かったので、強いスタンダードを作る必要がありました。コーチが伝統を築いてくれました。コーチからは水分補給や自分の身体をコントロールすることの大切さを学びました。メンタルがかなり強くなり、エディー（前日本代表ヘッドコーチ）の練習に耐えることができたのはコーチのおかげだと思っています。社会人になっても、しんどい練習にも耐えられます。



そういった私のベースを作ってくれたのは指導者の方々です。エディーにも土台を広げてもらいました。練習は大学よりもきつかったです。中には練習についていけない選手もいました。ハードな練習についてこれない選手は代表には呼ばれないのです。強い人しか残らない。きつい練習がたくさんありましたが、それに耐える能力ができました。グラウンド外で起こっていることにも耐えられるようになり、つらいこともあきらめずに立ち向かっていくことができるようになりました。

前半開始5分で

2015年のイングランド大会で南アフリカに勝ちました。ずっと弱いと言われていた日本が強い南アフリカに勝ったのです。練習をちゃんとすれば勝てるということを証明できました。日本は弱い、小さい、足が遅いと言われてきましたが、負けた時に言い訳にはいけないと思いました。以前の日本代表は心のどこ

かで勝てないという気持ちがあったのですが、今の日本代表は勝てると思って試合をしていますし、実際に勝ちに行っています。

試合を振り返ると、前半は2点差で折り返しチームはいい状態でした。点差が離れてしまうと、またやられてしまうのではないかと、という気持ちになってしまいます。ゲームプランでは10点差以内に抑え、相手を焦らせること。焦ると今までやってきていないことをやり出します。やっていないことをやり出すとチームが崩壊しますので個人個人がプレーし始めます。そうなれば優位に立てる。実は前半開始5分でこれはいけると思っていました。前半5分でみんなのスイッチが入っているのがわかりましたしタックルも100%で行っていました。逆に相手はボールにあまり絡んできていなかったから、これは勝てると思いました。チーム全体が、メンタル、準備、分析、やるべきことが明確になっている雰囲気がありました。

大きな決断を前に

試合終盤の攻撃時、蹴ってゴールをねらって同点というところまで来ました。それだけでも快挙なのですが、その時考えたのは、「同点は勝ちでも負けでもどっちでもないし、キックをミスしたら負ける」ということです。それは、勝ちに行くチャレンジではないからしない方がいいと思いました。チームにとっても、日本のラグビー界にとってもチャレンジして終わる方がいい。チャレンジしてトライをとったら最高ですし、勝ちに行つて負けるほうがまだマシだと思ったのです。同点ではインパクトが弱い。ポイント制で考えると、同点でもよかったのですが、ここまでの流れで同点をねらうというのは、私にとって負けに等しかったのです。

すぐに、チャレンジをするプラン、トライをとれるようなプランを立てました。相手の表情を見ると明らかに焦っていました。さらに相手はシンビン(※)がいたから一人少ない。ということはどこかに穴がある。だからスクラムをして押し切ったらトライ。ダメだったらリターンでチャレンジ。外まで振ってディフェンスを寄せておいて、一気にトライをとる。それは選手みんなの共通意識で、その場でペナルティキックという選択肢はありませんでした。スタッフは「ショットを狙え」と言っていたのですが、みんないけると思っていたから、私から聞くまでもありませんでした。あれだけたくさん練習してきて、行くしかないと思いました。監督からは「自分のやりたいことをやれ」と言われていたので、最終的に決断したのは私です。もしショットにいて負けたら、「何でスクラム行かないの？」ってなりますよね。後悔はしたくない。その時の決断について監督は、試合後に冗談交じりに「俺の話聴かなくて良かったね」と話をしていました(笑)。

※反則や危険行為を行った選手に課せられる10分間の一時的退出



ベスト4のメンタリティ

決勝トーナメントには行けませんでした。後悔はありません。試合に勝つことが大前提です。その中でポイントとか色々あるけど、まず勝つことが一番。決勝トーナメントに行けなかったことは残念だけど、次のチャンスはある。2019年はベスト4に行きたい。3試合以上勝つて、その次の試合も勝つ。準々決勝で勝つのです。言うのは簡単ですが覚悟が必要だと思います。言って終わってしまう人のほうが多い。どうせ

やるなら大きい目標を持っていたほうがいい。一段ずつ着実にステップアップしていきたいと思います。

そのためには、日本代表は考え方を変えなければいけない。「ベスト8をねらうメンタリティ」と「ベスト4をねらうメンタリティ」とは違うと思います。ベスト4に行くための行動とスタンダードをチームの中でまず決めないといけないのです。ベスト4をねらうのであれば、やはり練習を厳しくしないといけない。さらには練習をしていないときの態度、行動が大事。誰も見ていないときの行動です。ベスト4との差は多分そこにあると感じています。誰も見ていないところを変えるのは一番難しいのです。僕自身もサボっちゃうからそこを直さないといけない。

前回と違ってサンウルブズというチームがあるから、それとどうバランスをとるかがポイントになります。スーパーリーグと代表でどう連携するか。同じ選手が所属し、監督も同じですがチームは別であり代表は特別です。サンウルブズはただの一つのプロチーム。だから代表に来た時は、リラックスした状態で来てはダメで、代表の「タフなスタンダード」に耐えられないといけません。

キャプテンシー



高校や大学時代を振り返ると、ほとんど日本語をしゃべれなかったこともあってコミュニケーションは難しかったです。今でも奥さんに「その日本語違うよ」と言われます。しゃべれるようになって、本音はしゃべれない。周りの仲間にも本音は出ない、出さない。両方ですね。日本代表の前キャプテンの廣瀬さんにはもっと本音を出せと言われました。抑えなくていいよと。監督からもよく考え方が日本人すぎると言われました。ストレートに伝えればよいのに、まわりくどく伝えるから、それを変えろと言われます。ただ私は

意識して感情的にならないようにしています。練習中も試合中もトーンを抑えて話をします。大きな声でワーワー話をすると、相手からするとプレッシャーを感じているように見えるものです。それから、自分が冷静に話さないと、仲間が冷静に聞いてくれない。日本には自分がうまくいっていないときにワーっとしゃべる人が多い。ニュージーランドは自分が負けていても冷静にしゃべる人が多い。良いことがあったら大きな声を出すけど、そうでないときはキャプテンとして冷静に話すようにしています。

キャプテンはプレーだけでなく、キャプテンシーがある人、色々なことを理解している人になる必要があります。日本に必要なのはリーダー。「こうやる」という人です。日本では、自分で責任をとりたくないから、「みんなで決めよう」となる。「こうやる」と決めて負けたら自分の責任になることが怖いのだと思います。今はキャプテンではなくなり、難しさを感じていますが（取材時10月）、最終的には誰かが決めなければならないのです。キャプテンについていくことは簡単ですが、難しいのは監督が代わっても前回の監督がやったことを引きずってしまうことです。今の監督のスタイルと、今のキャプテンのスタイルでやるのがベストなのですが、僕の中で難しいのは、前大事にされていたものが、今大事にされていないことです。2019年日本大会までにキャプテンに復帰するかどうかはわかりませんが、もし復帰したらガラッと変えると思います（笑）。

これからの子どもたちに

「代表になりたい！」という基盤を作りたい。そのために代表が憧れのチームになるべきです。子どもだ

けじゃなくて、大人にも「代表選手カッコいい！」と思ってもらうのが理想です。そうすれば代表になりたいからと下から良い選手が出てきて強くなると思うので、代表を目指してほしい。目標が高くなると、日本のラグビーがどんどん強くなる。ラグビーは勇気が必要なスポーツであり、勇気を与えるスポーツ。そのために子どもたちにはメンタルを強く鍛えてほしい。ついていける人間を作ることをしてほしい。タックルとか行かない人、口だけ言って行動しない人にはなかなかついていけない。強い人、口で言って行動できる人。

「タックル行けよ」って言って、本人がいかないのはダメですね。指導者には、選手としゃべれない環境を作ってしまうのではなく、いつも話ができるようにしてほしいです。練習中は厳しくしてもいいけど、練習を離れた時に一緒にキャッチボールできるくらいの関係ができたらいいですね。コミュニケーションがとれる信頼関係を作る指導者になってほしいと思います。

スポーツはもともと遊びからできています。だから、スポーツには楽しさがないといけないと思いますし、楽しさがなくなったら良くないですね。もちろん根性も必要。理不尽な練習も必要かな（笑）。でも、どこかで楽しいことを入れてほしいです。ラグビーは楽しいのです。

日の丸を胸に

イングランド大会で代表として戦った後、心身の回復のためにしばらく休みましたがだいぶ充電できました。日本ラグビーにプライドがありますし、ワールドカップは日本開催ということで特別な思いがあったので代表に戻りたかった。ラグビーだけではなく、「日本人の強さ」を見せたい。鍛えれば一番強い。格闘技の選手と話をしても、日本の格闘技の選手はメンタルが強い。代表復帰して心の持ちようがかなり違います。高校、大学、社会人と色々な人に良くしてもらって、色々な出会いもできて、だから日本代表はひとつの恩返しをする場。私が恩返しできるのは日本代表で、プレーで返すしかない。日本代表に戻れてよかったと思います。



リーチマイケル

1988年10月7日生 ニュージーランド出身
15歳の時留学生として来日し、札幌山の手高校、東海大学を経て東芝ブレイブルーパスに加入。日本代表としてのキャップ数は50を越える。2013年に日本に帰化し日本国籍を保有した。それに伴い、「マイケル・リーチ」から「リーチマイケル」に登録表記を変更。日本人プレーヤーとして活動することが可能になった。

～取材を終えて～

どの質問にも声を荒げることなく、淡々と落ち着いてしゃべる語り口が印象的でした。本稿にもありましたが、そのしゃべり方は意図的であったり、性格でもあったりと本人。荒々しいプレーからは想像つかない穏やかで「日本的な」姿に多くの方が魅了され、ついていくのかなと感じました。代表キャプテンに復帰され、今後どのような日本代表にしていくのか楽しみでなりません。（体育センター所員）

2019年のラグビーワールドカップ日本大会に向けて、リーチマイケル選手がキャプテンに復帰。日本代表がギアを上げています。強豪相手にも素晴らしい戦いを続けています。これからも応援していきましょう！！

11/18 フランス遠征第1戦 トンガ代表 6-39 日本代表 見事勝利！

11/25 フランス代表第2戦 フランス代表 23-23 日本代表 惜しくも引き分け！

(平成 29 年度神奈川県体育施設運営者講習会に講師として来所された 10/4 に、取材させていただきました。)

ストロングポイントで戦う

サッカー解説

早野 宏史

(はやの ひろし)

神奈川県出身で、サッカー解説者の早野宏史氏に
現代のサッカーや日本代表に必要なことなどを聞いた。



進化すること

日本がワールドカップ予選でオーストラリア戦に勝って「よかった！」と騒ぐのはいいことだと思いますけど、日本サッカー協会としては日本チームが目指すのはベスト 16 以上ですし、最終的には優勝したいという目標を持ってやっているはずなので、本大会に出場が決まって満足するのではよくないと思います。本大会などで 1 点差負けして「あともうちょっと・・・」ってなっていますが、その差は大きいのです。岡田監督の時代 (2010 年ワールドカップ) に守備的にやってベスト 16 に進出しました。さらにその上に行こうとしましたが、2014 年のワールドカップでは守備的な戦い方をやりきらずに終わっているのですね。その方向性を決めたのに、なぜまた世界のトレンドと言われるものに戦い方を変えてしまうのか。その情報を取るのはいいいのですが、日本代表のベースがあってこそその新しいトレンドだと思っているので、「どうやって日本人らしく戦っていくのか」を現監督には期待したいと思います。継続性がないので心配しているのです。失敗してもいいじゃないですか。例えばスペインっていうのはずっと無冠の帝王と言われ勝てなかったけれど、やり通して連覇を成し遂げています。ドイツも同じやり方で自分たちのベースを持ちながら進化している。ブラジルもそうです。ところが、日本の場合は「もっといい方法を」と言いながら結局核の部分がないがしろにされて代表監督が代われれば戦い方も変えていってしまう。なぜ一回失敗したからといってそれを反省もせずに変えていくのか分かりません。どういうサッカーをするかというのがものすごく重要だと思います。

日本のオリジナリティ

結果は大事だけど、継続性ももっと大事だと思っているので、出場が早く決まりあと一年もない間に「どういサッカーで日本のサッカーをつないでいくのか」というのを見たいと思います。あのオーストラリア戦は、はまってよかったと思う一方で、あれだけで、世界のベスト 16 から上がっていきけるかといったら疑問です。守備的な考え方じゃないですか。2010 年の南アフリカ大会のサッカーを継続させていくのかと言ったらそうでもないし、やり方が全部変わっているから、次どうやって行くかが心配で、今回の予選も山口蛍の得点と大迫が機能していなければ、突破していないと思います。守備的だとか攻撃的だとかメディアの簡単な情報ではなくて、サッカーというものは攻守があり、攻撃的な部分はこうする守備的な部分はこうすると、相手によってバランスを取れるようなチームにならないと、フィジカル的に弱い日本が世界のトレンドと同じことをやっても絶対勝てないですよ。だからオリジナルを作ってほしいですね。

現監督の、フランス人特有の「自分の言うことを聞け」という、その姿勢はありだと思一方で、アルジェリアに行って成功するのは押さえつけてやるからで、日本人には向いてないと思います。日本人は賢い民族なので馬鹿にするなど言いたいです。もっと自主性があるやり方で、ダメ出しをしてやってほしい。現監督はダメ出しをする能力は高いです。ただ、日本に適應するかどうか。アルジェリアはフィジカルが強いし個のサッカーをしていましたが、日本に個のサッカーを導入すると難しいのではないかと思います。しかし、これはやらざるを

えないので、日本選手の個の能力がアップしていくことを期待しています。

ストロングポイントを磨く

ドイツやブラジル、スペインなど強豪と言われる国は、ブレないストロングポイントを持っています。進化を遂げているのに、ベースのところは変わっていないと感じます。日本も日本人が持っているストロングポイントを崩さないことが求められていると思います。個人なのか、組織なのか。世界のトレンドや外国がそうしているからと言って、ブレているようでは世界には歯が立ちません。日本人には結束力や協調性があり、大事にすべきことは「犠牲心」をチームに生かしていくことであると思います。人のためにチームのために動ける、それが出せる国だと思います。みんながその意識でゲームをすれば11人が20人の力になる。そういう組織を作っていくべきと考えています。ハートの部分でストロングポイントを見出せるはずです。

現代サッカーはスピードが求められます。個人で見えていくと判断能力が一番大切です。個人の能力をアップするといいますが、それをどうしていくのか。判断をどうトレーニングしていくのか。どうやって点を取るのか、どうやってボールを奪うのか、今は何をすべきなのか、常に判断をしていくことで個人の能力はアップしていきます。キックする、パスする、ドリブルするなどのプレー中の判断ができていくかどうかを見極めることも重要となってきます。個人には基本戦術があります。まずは情報を収集すること。そしてボールに詰めていく。パスするのか自分で行くのか次のプレーにつなげていく。それを判断していくのです。個人の戦術が上がれば、組織に影響を与えます。組織が活性化される個人の集団であってほしいと思います。

世界との差は簡単には埋まらない

世界との差は簡単には埋まらないと思います。100年以上歴史のある国とはそう簡単には埋まらない。さらにいうとヨーロッパの方は、いろいろなやり方をすごく考えていてどんどん進歩しています。ヨーロッパに行く選手も増えているけれど、伸び幅はそんなに大きくないのが正直なところです。ただ、サッカーというスポーツの認知度は高まってきました。子供を含めたサッカー人口は増え、野球には近づいてきました。経営者もお金がない中でいろいろな作戦を立ててやっていますね。本来ヨーロッパだとありえないことです。お客さんはサッカーを見に来るのです。日本は集客するために露店を出し、イベントをしないと集客できませんがここが全然違う。文化が違う。日本オリジナルでファンを増やしてどんどん来てもらっているのはいいことだし、ピッチもよくなっていますが、日本人は貧しさもないし、ブラジルのように「サッカーでプロになって稼ぐんだ」というハングリさもないので、生き残っていくという土壌がなく難しいとは思っています。

花を咲かせるために

昭和39年の東京オリンピック当時を知っている人間として、東京2020オリンピックはまた違ったオリンピックになると期待しています。当時は、復興してちょっとしか経っていない時期であり、お祭りでしたが一生懸命でした。現在は水泳とか若い選手がどんどん出てきて、サッカーだけ埋没するわけにはいかないので準備しているし、銅メダル取ったのがメキシコオリンピックなので、やっぱり金メダルを狙っていくぐらいの活躍を期待しています。その気持ちがなかったら、選手のモチベーションにはなりません。オリンピックは年齢制限があり、ワールドカップとの差別化をしているので、だからこそ今から準備して、若い年代を育ててホームタウンの東京で優勝をする目標をもってやってもらいたいです。世界の潮流ですが、何年も前からサッカー協会として動き、代表を強化しています。強化は3、4年では無理です。日本は、アンダー12とか15のところから選手を引き上げていて、17や20のワールドカップに出場を果たしています。今まで出られなかったのが、今回出ているということは、成果が出始めているということです。そういう選手たちが東京に出るための手順を踏んでいる。ワールドカップのために育成年代の強化をずっとやり続けていて、やっと成果が出始めているので、2020年に選手が育ち強化が実ると思います。東京で花を咲かせるためにこれまでもしてきたのです。

サッカーが辞められない理由

現役時代に苦労したことはいっぱいあります。日本代表のユースに試合に出られなかったり、大学に行っても出られないときもあつたり、けがを抱えていた時期もありました。ただサッカーを辞めようと思ったことは幸いにして一回もありませんでした。サッカーって答えがないですよ。できないことも多いけど、私は失敗よりもできたときの成功の方に可能性を見出す性格なので、もっとできるんじゃないかと思ってチャレンジを楽しみにします。サッカーというのは一つじゃない、そのあたりがものすごく楽しく感じます。サッカーには野球の一壘二壘三壘のような場がなく、同じ状況がほとんど生まれません。それが辞められない理由だと思います。

指導者はやっぱり大切です。素晴らしい環境があり、そこに子供たちが集まることとしっかり教えられることがセットになるとやっぱり根付いていくのです。ここに来れば、サッカーやバレーやバスケ、陸上楽しいしうまくなれると思える場所を作ること、子供たちも集まってくるのです。指導者が努力しなくてはならないし、そういう場があれば本当に有意義な空間になると思います。

監督という職業

監督というのは特別な職業です。私はその監督に急になったことがあり、大変な思いをしました。マリノスの監督になったときは、オーストラリアでのキャンプ中、前の監督が来ないというハプニング。そして急に監督になって、優勝を掛けて残り 10 試合を戦いました。そのキャンプで選手は鼻水たらしながら涙を流しながら砂浜をたくさん走っていました。私はコーチとして「勝ちたいならそれをやれ！」ってやっていたので、一か八か監督を受けました。選手をコントロールするのは難しいですね。11 人だけじゃない。30 人のメンバーすべての選手のコントロールをしなくてはならない。なかなか思ったことも伝えることができません。そこに苦労を感じます。選手の時の成功した喜び以上に監督になると喜びは 30 人分大きくなります。逆にプレッシャーも 30 人分大きくなります。うまくいったときの思い出は少ないですけど、模索していく苦労が大きいのはそこですね。監督と言っても 39 歳の時と今 62 になってやるのと違う人物だと思う。怒るところも違うし褒めるところも違う。僕もわがままな選手だったから、わがままな選手の気持ちがわかる。監督としては許してはいけないのだけれど、我慢することは経験になりました。直接 1 対 1 でいうことは容易にできますが、我慢して人を見るということは経験になりました。コントロールは大事です。

体育センター所長（左）と



クラマーさんを追いかけて

クラマーさん（※）を尊敬しています。70 歳まで指導している。私も監督要請を受けた時のために体を動かしています。やってみたいのは最後まで指導者で終わるといことです。現場の苦労は分かっていますが、なぜかそこに行ってしまう。成功した時の喜びだとか、選手の涙とか思いが素直でね。いい結果が出たときの喜びが与えられるのはいいですね。反対に失敗したら罵声を浴びますが（笑）。それでも選手たちが喜ぶ結果を出すことはやりたいと思います。若い人たちをしっかりとしたサッカー選手に育てる役に立てればいいかなと。僕にはそれしかできない。子供たちが「やりたい」と来るところで指導をしたいですね。ちょっと助けをするくらいですが。コーチは教えることもしますが、相手がいて自分の仕事があるのです。指導者は 1WAY ではなく 2WAY でやるもの。相手がどうなっているのかをもう一回見て、方法を示してあげるというのが大事ですね。

※デットマール・クラマー・・・日本サッカー界初の外国人コーチであり、日本サッカーリーグ創設に尽力したことから「日本サッカーの父」と称されている

早野宏史

1955 年 11 月 14 日生 神奈川県出身
県立生田高校から中央大学を経て、日産自動車（のちの横浜 F・マリノス）に加入。引退後、Jリーグ開幕とともにマリノスのコーチに就任。その後、監督も務めた。ガンバ大阪や柏レイソルなどの監督を経て、現在は解説者として活躍している。

総合型地域スポーツクラブ活動紹介

特定非営利活動法人 SUERTE

【茅ヶ崎市】

私たちは、茅ヶ崎市を中心に 2012 年から総合型地域スポーツクラブとして、幼児から高齢者まで満足して頂けるプログラムを提供できるよう活動しています。

初心者からトップアスリートを目指す上級者まで幅広いニーズに応えられるよう、元サッカー日本代表や現役の一流ダンサーがインストラクターとなるなど各教室とも充実した指導体制を整えています。

中学生サッカーチーム SUERTE FC Chigasaki は、2016 年度神奈川大会を準優勝、関東大会出場を果たし、サッカースクールは日本初となるドイツ製ボードによる最先端のトレーニングを導入予定です。

体操・ストレッチは、主婦層の健康維持や、高齢者は車で公園等に出掛けウォーキングを行い交流の場としても楽しんでいます。幼児から高齢者までを対象とした、スポーツリズムトレーニングやヨガは、公認インストラクターが運動機能の向上・認知症予防・シェイプアップや健康維持を目的として活動しています。カヤックは、相模川を主なフィールドとして活動中です。教室を超えて幅広い年代と交流を深め、楽しみながらスポーツに取り組める地域に根づいたクラブを目指します。ご興味のある方、ぜひお気軽にお問い合わせください。 HP : <http://www.npo-suerte.net>



特定非営利活動法人 FCコラソン

【相模原市】

「クラブ員はファミリー」を合言葉に幼児から中学生、社会人、シニア男女、女子中学生のサッカー、小中高校生の陸上、高齢者向けの体操教室、幼稚園の正課体育指導を行なっています。法人化前の 1992 年から相模原市北部でサッカーの活動（津久井又野公園他）を行なっていましたが、2006 年に陸上部門（ギオンスタジアム他）、2008 年から中学生チームの支部「FC コラソン・インファンチル淵野辺」（大野北中他）、2013 年から女子中学生サッカーチーム「FC コラソン相模原フェミニノ」（向陽小他）設立と活動は市内全域になってきています。サッカー部門はすでに 25 年の歴史があり、これまでに 7 名の J リーグ選手が OB から誕生しておりますが選抜して育成しているわけではなく総合型地域スポーツクラブのあり方の通り「全ての人々が自分のレベルで楽しくプレーできること」を実践していく中でトップレベルの選手は育つと考えています。陸上も同様ですすでに 10 年の歴史の中で全国大会出場選手を多数輩出しています。また、20 年以上ブラジルとのサッカー交流を続けており、サンパウロ州には兄弟クラブである「コラソンブラジル」があります。サンパウロ FC と友好関係にあり今年 10 月、FC コラソン創設 25 周年を記念してサンパウロ FC ソシアル U12 を招待し 8 チームによる国際大会を開催しました。今後はさらにクラブ、地域の拠点になるようクラブハウス、フィールドを建設できるよう取り組んでいます。

HP:www.fc-coracao.com facebook: /fc.coracao instagram: /fc.coracao twitter: FC_Coracao_JP



東京オリ・パラ 1000 日前!

東京 2020 オリンピック・パラリンピックまで 1000 日を切りました。開催地東京を中心に準備が進み、神奈川県もイベントなどを通して、オリンピック機運を盛り上げています。県内各地で行われたオリ・パラ関連のイベントを取材し、各会場の「熱」をお伝えします。

様々なイベント

横浜国立大学 オリンピック・パラリンピック特別公開講座 2017

(横浜国立大学教育文化ホール)

11/17

YNU 横浜国立大学 オリンピック・パラリンピック特別公開講座 2017
県民とともに考える
オリンピック・パラリンピックの意義と横浜国大の役割

「横浜国立大学 オリンピック・パラリンピック特別公開講座 2017」が開催されました。日本のスポーツを牽引する方による講演や鼎談を通して、県民の皆様とともにスポーツの意義や大学の役割について考えました。



長谷部雄一 大学長



鈴木大地 スポーツ庁長官



パラリンピック競泳金メダリスト

河合純一氏

アスリート鼎談「見て聞いて感じるー世界をつなぐスポーツコミュニケーションー」



リオ五輪日本代表柔道チームリーダー

木村昌彦氏



アテネ五輪柔道金メダリスト

鈴木桂治氏



ロンドン五輪女子 100mハードル代表

木村文子氏

オリンピック・パラリンピックで得られたことなど、独自の体験からお話しくだけました。2020年の東京大会は、ソフト面を大きく変えるべく、「すべての人が自己ベストを目指し、一人ひとりが互いを認め合い、そして、未来につなげよう」を3つの基本コンセプトとしています。是非それが実現されることを期待したいです。

大学として、2020年オリンピック・パラリンピックに向けて、学術での貢献、神奈川県との連携、県内開催競技（野球、ソフトボール、サッカー、セーリング）への協力、パラリンピック開催協力、知の拠点となることに力を入れていきたいという話がありました。

エリトリア国とブータン王国の陸上選手と日本人オリンピックとのトークセッション

(小田原市立足柄小学校)

11/29

東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の事前キャンプを契機としたエリトリア国・ブータン王国との交流事業が小田原市内の小学校で行われ、両国の陸上選手5名、元パナソニック女子陸上競技部の吉川美香さん、中村仁美さんが児童たちと交流しました。

選手による走り方教室や選手たちが鬼となって鬼ごっこなどで楽しみました。児童たちは最高の笑顔を見せていました。給食の時間では、生まれて初めて箸を使ったというブータン王国の選手たち。隣に座った児童が正しい持ち方を教え、手本を示すなど、交流を楽しんでいました。



障害者水泳のパイオニア成田真由美さんを招いたイベント「金メダルへの軌跡」

(茅ヶ崎市屋内温水プール)


12/2

パラリンピックで金メダルを獲得するなど大活躍の成田真由美さんを招いた講演会などのイベントが行われました。障害を持った後の水泳との出会いから、パラリンピックでメダルを獲得するまでの経歴などを分かりやすく話してくれました。「成田さんと一緒に泳ごう!」ということで、イベント参加者と一緒に泳ぎながら交流する時間もありました。成田さんからは、挑戦することの大事さや「パラスポーツを広めたい、障害者が積極的に社会に出て活躍できるようにしたい」という気持ちが伝わってきました。



「かながわスポーツタイムズ」に関するご意見、ご感想をお待ちしております。

発行回数 年4回

 神奈川県

神奈川県立体育センター

TEL 0466-81-2570(代表)

FAX 0466-83-4622

〒251-0871 藤沢市善行7-1-2

県立体育センター

検索

体育センターホームページ

体育センターツイッター

